



# 仙台・宮城元気ニュース

～仙台地域の元気な情報を掲載！～

Vol. 4

平成 23 年 6 月 15 日

【発行】

宮城県仙台地方振興事務所

## (1) “榮太楼の生どら” 発売再開！

塩竈を代表するお土産である“榮太楼の生どら”の販売が塩釜本店などで6月1日から再開されました。

東日本大震災により津波の浸水を受けた



(有)榮太楼は、生どらの製造ラインに大きなダメージを被りました。4月中旬には、被災を免れたラインで焼菓子などの製造を再開し、本店店舗で販売を始めましたが、地元のみならず首都圏等の販売店からも、生どらの製造再開を求める声が多く寄せられたことから、早期の生産復旧を目指してきました。

“榮太楼の生どら”はクリーミーな“あん”と特製皮の絶妙なバランスが好評で、昭和61年から続く人気商品です。現在は一部の工程を手作業で行っているため、生産量は通常の3割ほどで、生どら、ごまどらの2種のみ販売となっています。

齋藤会長は、「職人全員が気持ちを一つにして生どらを作ってくれている。現在、販売店舗は限られているが、ラインを本格的に復旧させ、今後もお客様の期待に応える商品を作り続けていきたい」と復興への思いを話してくださいました。

## (2) 白石パン仙台工場、震災直後の製造再開！

白石パンの名前で親しまれる白石食品工業(株)。仙台工場に灯りがともったのは震災から3日後のことでした。丸一日かけて工場の清掃と衛生検査を行い、「つくれるものをつくれるだけつくろう」との思いから、稼働可能な1ラインのみを使って、3月16日には製造を再開しました。



パッケージの印刷を任せていた企業も被災したため、透明なビニール袋に原材料等を記載したシールのみを貼って出荷することもありました。また、災害

時の支援物資協定を結んでいる大和町、大郷町、富谷町及び大衡村に、5月までに100万個以上のパンを提供しました。救援物資の提供は今も続いており、日に2千から3千個のパンを自衛隊等に届けています。

取締役社長室長である白石雄一さんは「私たちの活

動を通して皆さんの生活を支援していけるよう、頑張っている地元の事業者と、できるだけ取り引きしていきたいと考えています。今後は、宮城の米を使った米粉パンの製造も行っていきたいです」と、笑顔で抱負を語ってくれました。

現在、製造しているパンの種類は従来の6割ほどですが、生産量は元通りに回復しています。6月には新製品も発売される予定です。

## (3) 「仙山交流味祭 in せんだい復興市」開催 たくさんのご来場ありがとうございました！

5月31日から6月1日にかけて、仙台市青葉区勾当台公園市民広場を会場に、「仙山交流味祭 in せんだい復興市～春の恵み～」が開催されました。

「仙山交流味祭」は、仙山圏の地域特産物を生産者自らが販売する産直市であり、両地域の交流を深めることを目的に、平成15年から継続して行われてきました。今年は、震災からの「復興」と「更なる発展」を目指し「復興市」として開催されたものです。

仙台地域から20店舗、山形地域から27店舗が出店し、ホッキ飯やずんだ餅をはじめ、米沢牛煮込みや春野菜、山菜等の販売が行われました。

初日は、さくらんぼの種吹き飛ばし大会も開かれ、来場者の方々はこれから旬をむかえるサクランボを味わいながら、種の吹き飛ばしに挑戦していました。



また、会場では宮城県観光PRキャラクターである「むすび丸」や、おいしい山形推進機構「ぺろりん」のチャリティーグッズが販売され、募金箱に集まったお金は、売上げの一部と共に義援金として宮城県に寄付されました。

次回の「仙山交流味祭 in せんだい復興市～秋の恵み～」は9月28、29日に開催します。秋ならではの旬の味をお届けしますので、ぜひお越しください。

## (4) 「海岸マツ林保全活動」を糧にして ～ゆりりん愛護会会長の新たな意気込み～

名取市閑上海岸には、名取川河口から南側に約2kmにわたって30haのクロマツ林が広がっていました。かつてその一角が山火事で焼失し、県では平成16年度から2カ年をかけて、地元住民との協働

による「マツ林再生事業」に取り組みました。活動を通して、海岸マツ林に対する意識が高まり、平成18年には住民主体の活動組織「ゆりりん愛護会」が設立されました。植栽したマツ林の保育や海岸清掃、森林学習など、年を重ねるごとに活動内容は充実し、会員数や行事への参加者も増加しました。



その愛護会の立役者が、設立時からの会長である大橋信彦さんです。震災による津波で、大橋さんは自宅と活動の場であった海岸マツ林を流されました。しかし、そのような辛い状況にもかかわらず、明るい声で「大変ですが、頑張ります。今後は活動の場を名取市の内陸部に移して、愛護会の精神である地域の自然を守る心と地域に奉仕する心を、子供達に養わせていきたいです」と新たな決意を聞かせてくださいました。前向きに活動に続けようとする大橋さんの姿と弛まぬ努力に、勇気づけられ、そして大変心強く思いました。

#### (5) 水稲作付自肅エリアで大豆播種始まる！ ～岩沼市玉浦地区～

岩沼市の集落営農組織「玉浦中部地区生産組合」は、大豆の作付を予定していたほ場が、東日本大震災による津波の影響で、作付ができない状況に陥りました。



また、一部の農業機械も被害を受けました。

しかし、組合では、5月に開催した総会で、排水ができないなどの理由により、水稲の作付を自肅したほ場で、大豆の栽培に取り組むことを決定しました。ほ場の状況や天気予報などを確認し、6月はじめから大豆の播種を開始しました。6月中旬には、播種を終了します。

作付面積は、当初予定していた面積の約半分である10haとなりましたが、「復興に向けて、少しでも前に進みたい」との想いで作業にあたっています。

#### (6) 復興に向け、小松菜が仙台市場に出荷再開！

仙台SGC（七郷グリーンクラブ）の伊藤さんは、6月1日に津波被害後初めて、施設で栽培された小松菜を出荷しました。

へドロの剥ぎ取り作業の後、灌水除塩を実施し、5月2日には播種を行い、9日に発芽しました。1aのハウスから例年並みの収量を確保し、しょっぱくもならず、品質も従来通りとのことでした。

灌水除塩の実施に当たっては、灌水時間をいろいろ

変えて試してみました。最も短かったのは3時間で、今回出荷したハウスでは丸1日灌水しました。

灌水時間が長いほど生育がよく、むらになりにくいですが、乾くまで日数がかかり、表土が締まりやすく作業性が悪いことが分かりました。また、播種後においても、灌水しすぎで土壌表面が固くならないように、灌水の方法に気を付けています。

生育や収量が例年並みとはいえ、栽培管理には課題が多く、作物を育てながら畑土をつくる農業技術が必要とされています。

次のハウスでの収穫も迫っており、例年の忙しさを取り戻しつつあります。



#### (7) 松島でカキ養殖施設の復旧作業始まる！

松島湾内ではノリ、カキの養殖が盛んに行われていましたが、大震災により養殖施設が流出し甚大な被害を受けました。



漁業者は今秋の生産に向け、カキ養殖施設の復旧作業に取りかかりました。カキの施設は竹と丸太を組んで作成するため、陸上で竹や丸太を切ったり、穴

を開けて細工し、これを船で養殖漁場に運んで、竹を海底に刺して組み立てていくことになります。

津波により底泥が流され、竹を刺すのが難しくなった場所もあり、作業は重労働となります。しかし、今秋の生ガキの生産に向けて、希望を持って作業に取り組んでいます。秋には美味しい松島産カキが食卓に並ぶことと思われます。

★ 仙台・宮城元気ニュースは、宮城県の復興を目指す皆さまに少しでも元気になっていただけるよう、仙台地域の明るい話題や元気な人の情報を発信していきます。読者の皆さまからのたくさんの明るい情報をお待ちしております。

お問い合わせ先

宮城県仙台地方振興事務所

地方振興部（担当：鈴木、高橋）

(HP) <http://www.pref.miyagi.jp/sdsgsin/>

(E-Mail) [sdsinbk2@pref.miyagi.jp](mailto:sdsinbk2@pref.miyagi.jp)

(TEL) 022-275-9140